

○廣島縣沼隈郡浦崎村に隕石隕つ 去る九月十三

日午後七時三十分頃浦崎村字道越五百八十三番屋敷に隕石が落ちた。其落下の情況は隕石拾得者佐藤棟次郎氏の通信による。次の如くである。「私九歳になる孫娘と二人納涼中空より音聲を立て、真赤な火の玉が空より直線に落下す、落下すると火は消えた。形は三角にて長さ六寸、重量四百匁である」と云ふ。

○島根縣安濃郡波根西村海岸の硅化木 山陰本線

久手驛に近き海岸に集塊岩質凝灰岩が露出して居る。内に大なる硅化木がある。其の長さ六米、周囲は上部二米二、中部一米六、下部二米四五あつて大きさに於て日本では珍しいものださうである。(野津精氏の談話による)

○最上地方蕨根の利用 蕨は本邦各地の山野に自生す

る羊齒植物であるが其根莖の澱粉をさつて食料、糊料とし、其纖維を繩にするこは人の知る所であるが山形縣最上郡地方が最もこの利用に長じてゐる、こゝでは、秋季掘取つた根を水洗して乾かし、冬季まで貯へるのど、採取後直ちに作業するのどであるが、多くは農閑期まで貯へる、根を白で叩いて、然る後桶に入れ根十貫目に對し水五石乃至六石をそ、ぎ攪拌して靜置すれば澱粉は桶底に沈澱する、十時間ほどで上澄をすてる、くりかへして澄ませば愈白くなる、十貫の原料から八百匁乃至一

貫百匁される、一貫目三圓から四圓まで賣られる、蕨繩は其副産物で垣根用として天下一品の稱があり四十尺巻一把の價十五錢で取引せられる、山村の副業として試みられんことをおす、めする。(山形、川添報)

附言 編者はこの類の村落部部の報告について會員各位の投稿を歓迎する。

○新高山の高さの測量 陸地測量部は九月一日七月の

日附を以て表題の一篇及之に附するに新高山眞高算出経路要圖(十五萬分一)と題する新高山四方の三角網圖を發表した。次に其の説明を抜萃する。

陸地測量部に於ける臺灣の測量は大正三年に着手し大正十四年度迄に蕃地を除く周圍約千七百里に互り普く三角測量を施行せり、而して新高山方面にありては大正十二年度迄に阿里山方面まで測量を進めありしが大正十三年度に於て阿里山方面より三角測量を新高山に至る間に進め、別に嘉義附近の一等水準點より山地の西麓竹崎附近に至る迄水準測量を實施して新高山の高さを決定するに至れるものなり。

新高山の高さは竹崎附近に存する樟詩岑(標高二八米七七)沙坑(二三米九六)、大埔山(三一六米八八)の三角點(何れも直接水準測量に依りて高さを決定せるものなり)より發し大尖山(標高一三〇四米二九)、阿波泉山(一〇一八米二五)、大坑山(一〇二四米七六)、篤鼻山(一四二二米一〇)、海嵐山(一三三九米一六)、石壁山(一七四九米七三)、光壽山(一八一五米七七)、兜山(二二八米六四)、塔山(二四八〇米四八)、松山(二五五一米三三)、東水

山(二六〇八米也)、鹿林前山(二八五九米也)、東埔山(二七九米也)、の三角點を経て三角術的水準測量(三角測量にて得たる高低角と三角點間の距離を用ひ計算に依り高きを出す方法)に依り決定せるものにして精算の結果に依れば新高山三角點の眞高(三角點標石上面の高き)は基隆中等海面上三九五〇米。に存し其の高きには從來當測量部測量の結果に徴し二〇糎以上の誤差を存せざることを保證するものなり。

阿里山以東の測量及竹崎附近に至る水準測量の爲には大正十三年七月中旬より十月上旬に至る約二箇月餘の日子を要し作業員は阿里山蕃人を使役し幾多の辛酸を嘗めたり。

上記の如くで新高山の眞の高きは三千九百五十米と確定した明治三十年頃では四一四五米とされ其後三九九〇米とされ、明治四十三年からは三九六二米とされた新高山は復又低くなつたが今度は大丈夫誤差が二〇糎以内であるから之よりも實際上低くなることはない。是に於て新高山は富士山より高きこと百七十二米である。

○朝鮮江原道平康郡福辰山のチルクン

福辰山は美しい紫色のソーライトを含む霞石閃長岩の出るので有名である。該岩中には一寸栴檀石とも見える赤褐色の徑一糎乃至二糎の小結晶鐵物が出る。伊藤貞市氏の通信によると同鐵物はチルクンであつて結晶面には(111)、(110)、(321)がありスペクトル寫眞を取つて見ると非常に多くのゲルコニウムの線と外に稀土類の線とを出す云ふことである。朝鮮には平安北道江界郡化京面津坪里には長さ十裡に達する柱狀のゲルクンがあつて鐵

物愛好家を驚かした。江原道産のものは形が小さいが又美しい鐵物である。因に云ふ津坪里のものにはトリリア TiO_2 が 〇% 一六含まれて居る。

○奉天省の水田

奉天省にて昨年の水田總計二九、三五三町收穫穀量九十六萬石に達したるが、其耕作地たる水田は概して古來の沼澤乃至低濕地を改造したるもの多き爲地味肥沃にして、開墾後三年乃至五年は施肥を要せず、收穫物の品質亦優良にして内地米に異ならず、只開原及其以北に産する札幌赤毛白光頭等の如き極早生種に屬するは成育期間百日前後に過ぎざるを以て風味や、劣等なり、今水稻耕作者戸數及一戸當耕作反別を見るに、鮮人勞働者一人に對し二天地(一町二反)を普通標準とし、一戸を稱するは普通戸主の外妻及若者三名合計五人を一團とす故に一戸十天地を耕する也、勞働者一名に一町二反の耕作は之を内地農業者に比較すれば甚だ過大なるが如きも滿洲水田の實況は内地の如くならず、粗放なる耕作にて、氣候及水利上春の作付をいそぎ、多くは直播法にて苗代をつくらず、甚しきはばらまきのま、成長さすものにして除草の如き、開墾後一兩年を出でざるものは二回を以て十分とす、かく手數を省く故に收穫率低く最上田にて一反歩平均収三石七斗之を玄米として歩止り六割とす二石二斗則ち五俵取に過ぎざる也目下奉天各地に水田を經營せる鮮人は其耕作面積より見て四、八九二戸に達すべし、其主要なる産地は海龍、桓仁、通化、興京、輝南、柳河、東豐の各地にして吉林省に近き山間にあり撫順線延長して海龍に達するに至らば(奉海線といふ)この方面の米作は

更に面目を一新すべしと期待せらる、きく所によれば本年度の收穫豫想は良好にして春來氣候の都合もよく面積にて約三割を増加し、收穫に於て約二割を増すが故に凡て靱高百五十萬石を産するならんと云ふ。

○世界に於ける既成水力電氣

合衆國地質調査所の推算に依ると一九二三年末に於ける世界の既成水力電氣は約二千九百萬馬力で、これを一九二〇年末の推算約二千三百萬馬力に對比すれば約二六パーセントの増加である。この三年間に於ける六百萬馬力の増加のうち約百五十萬馬力が北亞米利加、約三百四十萬馬力が歐羅巴、百萬馬力が亞細亞で、歐羅巴に於ける水力電氣事業の著しい發達は英吉利を除ける他の工業國に於ける石炭の價格に起因するもので、左表は世界各國に於ける一九二三年現在の既成水電の馬力數及び發電の可能性を有する水の馬力數を示す。

北及び中央亞米利加

合衆國	既成馬力	可能馬力
メキシコ	10,000,000	35,000,000
アラスカ	100,000	6,000,000
ニューファウン ドランド	40,000	1,000,000
加 奈 陀	60,000	400,000
コスタリカ	3,337,000	18,350,000
ガテマラ	15,000	1,000,000
ホンヂュラス	4,000	1,500,000
	3,000	1,000,000

ニカラガ	400	800,000
サルヴァドル	2,700	100,000
巴 拿 馬	13,000	500,000
西 印 度	19,350	190,000
計	13,700,000	66,000,000

南亞米利加

亞爾然丁	25,000	5,000,000
ホリザイア	11,000	2,500,000
伯 刺 西	45,000	2,500,000
英領ギアナ	—	2,500,000
蘭領ギアナ	—	800,000
佛領ギアナ	—	500,000
智 利	90,000	2,500,000
コロンビア	25,000	4,000,000
エクアドル	5,500	1,000,000
パラゲー	100	1,000,000
祕 露	55,000	4,500,000
ウルゲー	—	300,000
ヴェネツエラ	12,500	3,000,000
計	675,000	54,000,000
歐 羅 巴		
瑞 典	14,600	8,000,000
諾 威	16,100	9,500,000
芬 蘭	310,000	1,800,000

地球

第四卷 第五號 四百七十一

露西亞	一五〇,〇〇〇	三,〇〇〇,〇〇〇	葡萄牙	一〇,〇〇〇	三〇〇,〇〇〇
エストニア	一六,九五〇	一二五,〇〇〇	アイスランド	—	五〇〇,〇〇〇
ラトヴィア及びリツアニア	五,〇〇〇	一〇〇,〇〇〇	計	一一三,〇〇〇,〇〇〇	五七,〇〇〇,〇〇〇
波蘭	八五,〇〇〇	一,四〇〇,〇〇〇	亞細亞	—	—
ウクライナ	四〇,〇〇〇	四二五,〇〇〇	中華民國	一六五〇	一〇,〇〇〇,〇〇〇
ユウカサス地方	五,〇〇〇	五,〇〇〇,〇〇〇	印度	一七七,〇〇〇	二七,〇〇〇,〇〇〇
洪牙利	三,〇〇〇	一七五,〇〇〇	小亞細亞	五〇〇	五〇〇,〇〇〇
チエコスロヴァキア	一五五,〇〇〇	一,〇〇〇,〇〇〇	亞刺比亞	—	—
ユーゴスラヴィア	一六六,〇〇〇	二,二〇〇,〇〇〇	波斯	—	—
埃地利	四九,〇〇〇	一六六,〇〇〇,〇〇〇	アフガニスタン	二,〇〇〇	二〇〇,〇〇〇
ルーマニア	三〇,〇〇〇	一,一〇〇,〇〇〇	西伯利亞	九〇,〇〇〇	八,〇〇〇,〇〇〇
勃牙利	八,〇〇〇	一,二〇〇,〇〇〇	佛領印度支那	—	—
希臘	八,〇〇〇	二五〇,〇〇〇	暹羅及び馬來諸州	四,五〇〇	四,〇〇〇,〇〇〇
土耳其	—	—	朝鮮	一八,三〇〇	五〇〇,〇〇〇
アルバニア	一,〇〇〇	五〇〇,〇〇〇	日本	一六九四,〇〇〇	四,五〇〇,〇〇〇
伊太利	一八〇,〇〇〇	三,八〇〇,〇〇〇	計	二,〇〇〇,〇〇〇	六九,〇〇〇,〇〇〇
瑞典	一四九,〇〇〇	二,五〇〇,〇〇〇	阿弗利加	—	—
獨逸	一,一〇〇,〇〇〇	二,一〇〇,〇〇〇	タンザール	—	五〇,〇〇〇
佛蘭西	二,一〇〇,〇〇〇	五,四〇〇,〇〇〇	モロッコ	—	二五〇,〇〇〇
英吉利	二五〇,〇〇〇	八五〇,〇〇〇	アルヂエリア	一三〇	一〇〇,〇〇〇
白耳義	六〇〇	—	チエニス	—	三〇,〇〇〇
丁抹	一五〇,〇〇〇	九,〇〇〇	トリポリ	—	—
和蘭	一五〇	—	エリトリア	—	—
西班牙	一,〇〇〇,〇〇〇	四,〇〇〇,〇〇〇	英領ソマリランド	—	—

伊領ソマリランド	—	小	許	—
黄金岸及びトゴ英統治地	—	一四五〇〇〇〇	—	—
リベリア	—	四〇〇〇〇〇〇〇	—	—
シエラレオネ	—	一六〇〇〇〇〇〇	—	—
セネガル	—	二五〇〇〇〇〇	—	—
リオデオロ	—	—	小	許
ガンビア	—	—	小	許
葡領ギアナ	—	—	小	許
南阿聯邦	—	—	—	—
アンゴラ	—	—	—	—
南西阿弗利加	—	—	—	—
(南阿聯邦統治地)	—	—	—	—
白耳議公衆及び統治地	—	—	—	—
佛領公衆	—	—	—	—
カメルーン佛統治地	—	—	—	—
ニジエリア及び	—	—	—	—
カメルーン英統治地	—	—	—	—
ローデシア	—	—	—	—
タンガニイカ(英統治地)	—	—	—	—
英領中央阿弗利加	—	—	—	—
英領東阿弗利加	—	—	—	—
葡領東阿弗利加	—	—	—	—
ベチニアナランド	—	—	—	—
アビシニア	—	—	—	—
埃及	—	—	—	—
象牙岸、ダホメ及び	—	—	—	—
トゴ佛統治地	—	—	—	—

雜報

佛領ギニア	—	二〇〇〇〇〇〇〇	—
佛領スマン	—	一〇〇〇〇〇〇〇	—
マダガスカル	—	一〇〇	—
計	—	一四〇〇〇〇	—
大洋洲	—	—	—
濠太刺利	—	—	—
新西蘭	—	—	—
比律賓	—	—	—
スマトラ	—	—	—
瓜哇	—	—	—
ホルネオ	—	—	—
(ニューギニア及びバプアを含む)	—	—	—
タスマニア	—	—	—
セレス	—	—	—
布哇	—	—	—
計	—	—	—
合計	—	—	—

○希臘に於ける養蠶業の發達 (The Electrical World, Aug, 1925)

一敗地に塗れて土耳其からの避難者が潮の如く希臘の地に入り込んだ時、彼等は二つの重要な産業を土耳其から希臘へ移植したのであった。美しい絨氈を織ること、蠶を育てること、がそれである。幾千の熟練職工を失つた土耳其に於けるこの二つの産業がその後どういふ状況にあるかは不明であるが、彼等の入國が希臘の經濟生活

に齎した所の影響は極めて大である。從來希臘の養蠶業なるものは極めて微々たるもので、殊に十年に互る戦亂はこの國の生氣を奪ひ、その産業を萎縮せしめたのであつたが平和の克復と共に小亞細亞に於ける養蠶の中心地たるブルサ其他から失業した熟練職工が多数に入り込んだ結果マセドニア及び西部スレーヌを中心として養蠶業が發達し、一九二一年には全國を通じて繭の産出高三百八十萬九千六百五十五封度、一九二三年には四百五十三萬三千二百五十封度、一九二四年には五百六十六萬封度を算するに至つた。一九二四年に於ける産出が一躍百萬封度以上の増加を示してゐるのは主として土耳其からの避難者の活躍に依るもので、それは政府の指導監督が適當に行はれたためでもあるが、その發展の大部分は避難者自身の奮闘に基因してゐるものである。アテネ商業會議所最近の調査報告に依る今日に於ける希臘の養蠶中心地はセツサリー、スレーヌ、マセドニア、ペロポネサス、ユーボイア島及びクリート島で、セツサリーのチルナヴォに産するを最上とし、ユーボイアのキミに産するものは主として蠶種の製造に使用されてゐる。しかし希臘國內に於て製絲作業に附せられる量は極めて小で、大部分繭として佛蘭西(マルセユ)及び伊太利(ミラン)へ輸出されてゐる。從來ブルサから蠶種の供給を受けてゐた波斯及びコーカサス地方に對し最近希臘がその輸出を開始してゐるのも注意すべきことである。

(Commerce Reports August 24, 1925 Bureau of Foreign and Domestic Commerce, U. S. Department of Commerce.)

新刊紹介

○耐震耐火的
建築土木原料土石と其利用 曾我 奎祐著

早稻田大學出版部發行 定價參圓五十錢

本書收むる所の土石礦物は石綿、石膏、硅藻土、滑石、菱苦土、重晶石、火山灰及びアスファルトの八礦物で、過般の大震災による損害の程度から考へて今後の土木建築に最も必要な原料に就きて記載したものである。然し此等の礦物利用に對しては獨り土木建築に關する事項ばかりでなく、一般に其利用の途を詳説して居る。猶吾人の多とする所は各礦物の産地及産出状態の條下に於て從來公表されたものを残りなく蒐集してあるのに加へて多くの専門家が未だ發表するに至らなかつた材料を獲て之をも編述した所にある。それで讀者は日本朝鮮支那に互つて各種礦物の存在、其の利用されべきや否やの點まで明亮に知る事が出来るのである。性状や加工法に對しても親切に詳細に説かれてあるから一斑の知識をも之によつて獲得する事が出来る。本書は書名の建築土木に必要である許りでなく、各種の工業家によりて参照せらるべきものである。本書の性質が以上の如きものであるから礦物、化學、經濟、地理等の授業に従事してゐる教育者に對しては稀に見るの好參考書である。礦物の中でも金屬礦物の様に人から大切に考へて居られぬ土石類について充分な知識を得る事は文化促進の意義から見ても誰に